

# 山崎郷土叢書

No. 93  
11.5.1  
兵庫県宍粟郡  
山崎町教育委員会内  
山崎郷土研究会  
電話 62-2000

## 『江戸時代の宍粟郡内梵鐘集成Ⅱ』

— 享保・宝暦・明和・安永・天明・寛政 —

片山昭悟

今回は江戸時代の宍粟郡内梵鐘について、享保、宝暦、明和、安永、天明、寛政にかけて紹介する。

### ◇享保のころ

享保十二年（一七二七）と享保二十年（一七三五）には、長谷川孫兵衛、長谷川五郎兵衛に、当時鋳物師を支配していた真継家当主親弘より鋳物師職の許状が発給されている。

### ◇宝暦のころ

山崎町母栖村道場元の喚鐘は、宝暦四年（一七五四）十月と陰刻されている。治工名はみあたらない。

### 目次

①江戸時代の宍粟郡内梵鐘集成Ⅱ	片山昭悟……	1
②松平家宍粟日記（延宝年間）	堀口春夫……	6
③山崎町歴史街道（二）	会報部……	12
④新宮宮内遺跡（国指定史跡）発掘調査概要……	……	13
⑤山崎藩本多家ゆかりの侍グッズ紹介	会報部……	14
⑥草津宿本陣と近江商人の発祥地	岸本正理……	14
⑦尼ヶ端の石碑建立について	史跡部……	16
⑧平成十一年度・十二年度役員一覧……	……	17

一宮町西安積の普門寺の梵鐘は、

「寶暦六年（一七五六）

治工 摂州大坂住鋳物師杉田伊右衛門

藤原安廣」

この梵鐘は、淡路津名郡柳澤村岩上大明神鐘である。平成六年に津名郡一宮町の地元に戻りしている。現在の梵鐘は、京都太秦岩澤の梵鐘である。

なお、旧々梵鐘は、昭和二十二年の梵鐘記録によると、安永四年（一七七五）十二月十三日のであったが、昭和二十年に太平洋戦争で供出されている。

また、寶曆七年（一七五七）十月に長谷川孫兵衛、長谷川五郎兵衛は真継家当主親弘より鑄物師職の許状が発給されている。

山崎町中野 桓武伊和神社の梵鐘は

「宝曆十一（一七六一）辛巳歳十一月吉日

播州宍粟郡金谷住

冶工 長谷川孫兵衛藤原吉正

長谷川五郎兵衛藤原家次」

鐘銘によると、正徳二（一七二二）壬辰十一月下旬初鑄であり、宝曆十一年（一七六一）に長谷川氏がともに鑄造している。

現存する長谷川氏の梵鐘では小茅野位王神社の梵鐘とともに代表的な貴重な資料である。

山崎町上牧谷の元有谷山菩提寺喚鐘は

「宝曆十一年（一七六一）

冶工 高田住 中村弥右衛門」とあり、赤穂郡上郡町の鑄物師によるものである。なお、赤穂郡高田住中井幸右衛門久吉の鐘が、一宮町上岸田字垣尻の御大師堂に見える。清雲山と法泉庵の銘が陽刻されている。



山崎町春安の願行寺喚鐘は

「宝曆十二（一七六二）壬午

京三条和田信濃」とある。

宍粟郡で宝曆のころ京三条和田信濃作によるものは、波賀町安養寺鐘が宝曆十四（一七六四）鑄直である。

安富町長野の真光寺喚鐘は

「宝曆十二（一七六二）午九月

冶工 菅原安欲」である。

冶工名は小さく囲って陽鑄されている。次の年の宝曆十三（一七六三）には菅原安欲は、千種町西蓮寺の喚鐘にみえる。

「宝曆十三癸未歳十一月 日

冶工 菅原安欲」

なお、冶工の菅原安欲は、坪井良平『新訂 梵鐘と古文化』一九九四によると大坂鑄物師とされる。

千種町岩野辺 福海寺喚鐘は

「宝曆十三癸未天三月吉日

京三条住國松近江」である。

西蓮寺の喚鐘と同じ年に作っていることがわかる。

波賀町斎木の安養寺喚鐘は、宝曆十四年（一七六四）に鑄直している。

冶工は京三条釜座和田信濃である。

福海寺喚鐘の次の年にあたる。

同じ京三条の作であるが、福海寺のは國松近江で、安養寺のは三条釜座和田信濃である。ほぼ同時期のものである。

一宮町河原田の大日山正福寺鰐口は、宝曆十四年（一七六四年）である。

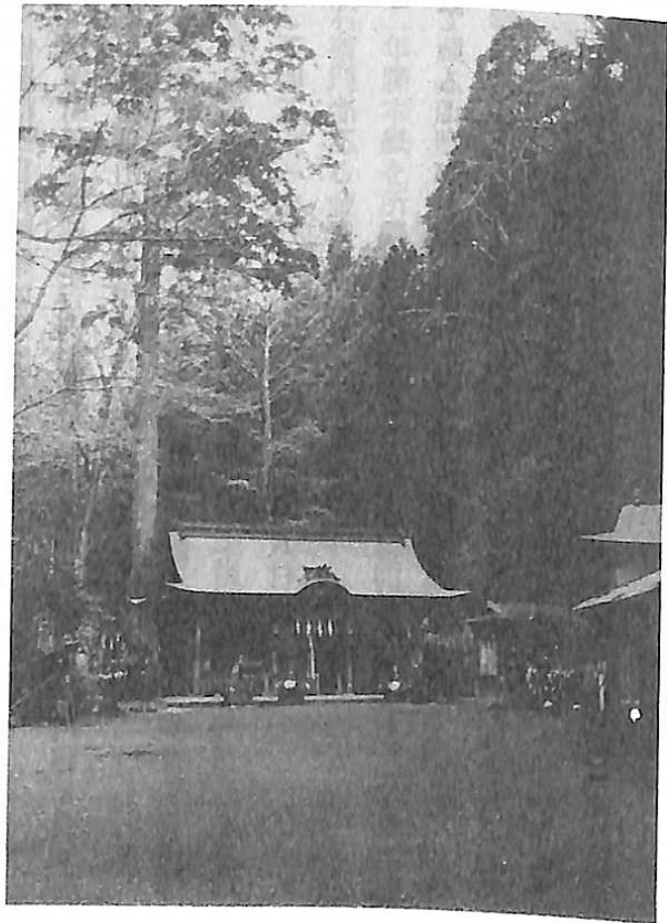
鰐口銘は

「三方庄 河原田村氏子中 宗兵衛

願主 庄屋宇衛門

八幡宮

干時宝曆四年申正月吉祥日」とある。



◇明和のころ

一宮町伊和中山の神福寺鐘は、『六粟郡内寺社ノ鐘々銘写シ』によると、

明和元年（一七六四）初鑄

寛政四年（一七九二）再鑄 とあり、

「鑄工 同郡

金屋住

長谷川孫兵衛尉藤原吉則」である。

山崎町上ノ観音堂の喚鐘は、

「明和七（一七七二）庚寅歳二吉日

播州六粟郡金谷住

大工 長谷川孫兵衛藤原吉正作之

長谷川孫兵衛の中でも藤原吉正である。

この鐘は金屋村でなしに金谷村であり、また、「大工」と陰刻されている。長谷川氏のなかで「大工」とあるのは、この鐘が初見である。次の年の山崎町上ノ岩上神社鐘にもみえる。

明和八（一七七二）十一月に長谷川孫兵衛、五郎兵衛は真継家当主量弘より鑄物師職の許状がみられる。

大工職は一國一郡において鑄物師の営業権を認めさせたのである。

山崎町上ノ岩上神社の鐘は、

『六粟郡内寺社ノ鐘々銘写シ』によると、

「明和八（一七七二）歳次卯春三月吉日

大工 長谷川孫兵衛藤原吉正

長谷川五郎兵衛藤原家次」とあり

この鐘は長谷川孫兵衛、長谷川五郎兵衛と連名であり、共同で制作している。

山崎町寺町の大雲寺の喚鐘は、明和八年であるが治工名はみられない。

◇安永のころ

山崎町大沢の円通庵喚鐘は、

「安永三年（一七七四）春甲午三月日」

治工 同國同郡金屋村

長谷川孫兵衛藤原吉正」である。

長谷川孫兵衛藤原吉正は、明和七年（一七七二）の山崎町上ノ観音堂の喚鐘、明和八年（一七七二）の山崎町上ノ岩上神社鐘にも見える。

安永十年（一七八一）二月に長谷川孫兵衛、長谷川五郎兵衛は、真継家当主量弘より鑄物師の許状が発給されている。

◇天明のころ

佐用郡三日月町茶屋の慶雲寺鐘を、天明二年（一七八二）に

長谷川孫兵衛藤原吉則が鑄ている。天明のころ佐用郡にも長谷

川孫兵衛は山越えで出職をしたのであろうか。

山崎町下牧谷の大倭物代主神社の梵鐘は『兵庫県神社誌』によると、

「天明三（一七八三）歳壬寅之夏四月八日

治工 金屋邑住

長谷川孫兵衛尉 藤原吉則作」とあり、再鑄され

ていることがわかる。

なお、この鐘は貞享二（一六八五）乙丑二月初鑄である。

天明三年（一七八三）三月に長谷川孫兵衛、長谷川五郎兵衛は、

真継家当主康寧より鑄物師職の許状と「大工職」を発給されてい

る。

大工職となることから長谷川孫兵衛尉と「尉」を使用するのであろうか。

一國一郡において鑄物師の営業権を認めさせたのであるが、長谷川氏は佐用郡にも鑄物師の営業範囲が広がる。

その後、寛政年（一九九七）の山崎町小茅野位王神社にも長谷川孫兵衛尉藤原吉則とある。

波賀町安賀の満願寺喚鐘は

「天明六（一七八六）丙午歳十二月吉日

冶工 當國當郡住

長谷川氏

藤原吉則」とある。

この鐘は長谷川氏によるもので現存する中、長谷川氏と陰刻されている。

なお、長谷川氏とするのは文化五年（一八〇六）一宮町百千家満の満福寺喚鐘がみえる。

◇寛政のころ

山崎町船元の一雲寺喚鐘は

「寛政元年（一七八九）西曆十月九日

冶工 當郡住

長谷川孫兵衛藤原吉則」とある。

長谷川孫兵衛の現存する喚鐘の中では美しい鐘である。

寛政五年（一一九三）長谷川五郎兵衛に真継家当主康寧より鑄物師職の天福元年牒が発給されている。長谷川五郎兵衛はこれまで蔵人所牒の仁安二年（一七六七）牒本紙を所持している。仁安二年牒本紙を所持しているのは、播磨國では姫路野里の芥田五郎右衛門である。長谷川孫兵衛は天福元年（一一三三）牒写を所持している。

この年の三月に播磨國完栗郡岸田村（現一宮町上岸田）佛心寺において完栗郡金屋村鑄物師長谷川孫兵衛と京都三条釜座鑄物師和田吉兵衛との争論が起こっている。

完栗郡（現完栗郡）には長谷川孫兵衛が居ながら京都三条釜座鑄物師和田吉兵衛が釣鐘を鑄たことから、争論となり、結局その釣鐘は番人を付け封印して埋めたことで、決着している。全国の鑄物師に播磨國完栗郡で起こったことを真継家より申し渡している。

この写しが富山県高岡市の高岡鑄物師に送られているもので、高岡市立中央図書館に現存する。

私はこの文書を平成五年（一九九三）三月に観覧させていただく機会に恵まれた。

この言い伝えが一宮町上岸田に残っていることを地元の秋武光二氏に平成七年十一月十四日にご教示いただいた。字鐘鑄場（かねば）において鑄たができが良くなり、朝日が早く当たる南天の

ところに埋めてあるとされるが、この鐘が三条釜座鑄物師和田吉兵衛のものかさだかでない。

### 松平家穴栗日記（延宝五年）

堀口春夫

二月廿七日

一、水野三郎兵衛より手紙来たる。御家中の者共さかやき、御跡目仰せ出だされてよりすりかえと申し参り御家中のもの精進今日五十日に候間、明日より何も落とし候へと申し参る。今日裏門へ御二所様御出なされ候。

廿八日 曇後天氣

好し

一、御下屋敷へ御二人御出、昼御膳御上り。御前にも女中残らず御風呂に御入り、夕御膳二所様、左京様召し上がりなされ、弥兵衛に御三人様より御盃下され、左京様御立、以後御盃出す。弥兵衛、彦兵衛、

外科・内科

# 山 中 医 院

院長 山 中 陽 一

山崎町西町・TEL②0036

御呼御吸物出し御盃下さる。次々女中衆へも御酒下さる。観音堂より御下り、それより千寿海道金杉の方へ御出、寺へ御入り御茶上がる。錢二百文坊主へ遣わされ、それより御出清水寺三十三間堂、薬師堂迄御ひろい、それより御下屋敷へ御入り。御共には弥兵衛、彦兵衛、理安、孫兵衛、閑斎、又五郎、彦七、半兵衛、歩行三人、中島彦左衛門、源助、孫九郎、勘六、御末番二人。何れも精進落としの様に下谷様に仰せられ、御上屋敷下屋敷両所にて御料理下さる。（注釈）浅草清水寺は江北山清水寺と号す。昔は浅草橋の内にありしが明暦大火跡新堀端に移る。天長年中慈覚大師天台法流の一院を建立ありて自ら一刀三礼にして千手大悲の像を作り本尊とす。その後星霜を経て堂塔大いに破壊せしを文禄年間慶円法印、靈告を得て堂宇を修理し昔に復せしむ（江戸名所図会）。浅草三十三間堂大江戸の弓師備後と云える者、射術稽古の為、京師蓮華王院を摸して三十三間堂を創立せん事を乞う。よつて浅草に於いて地を賜り諸家に勧進して建立の功を募る。寛永十九年十一月落成す。然るに元禄十一年九月回祿の災に罹りて灰燼せしかば深川富岡八幡宮の二町ばかり東の方の地に移させられたり。浅草清水寺の辺を今矢崎と字するは三十三間堂の旧地なればなり。なお江戸三十三間堂矢数帳には慈眼大師の発起なりとあり。又一説には昔森刑部直義と云える射術一流の武士、これを建立し江戸射術の達人敬景と共に力を尽くせしなりと言ふ。

廿九日 雨降り

一、完粟より町飛脚にて状来る。御六尺今日より罷り出る。八左衛門儀はそのまま置き申し候。

一、京都へ呉服の儀申すべく飛脚遣わす。

三月朔日 天気好し

一、瀧波与兵衛、少将様の御召し用の、のしめの衣一端かし申すべき由。

一、紗綾綸子か羽二重の内に少将様御召し用一端染めさせ給い候様申遣わす。

一、裏御門口へ御出、夕膳召し上がられ候。奥様より黒塗りの蒔絵御硯箱一、黒塗蝶御紋付の刀懸け一、弥兵衛へ下さる。黒塗りの蝶の御紋付重箱一組、弥兵衛娘るりに下され、ちよう足の膳に下さる。一、黒塗食籠一、宇右衛門に下さる。右おつう殿より奥様御意の由にて下さる。町飛脚に完粟への状箱出す。只今御台所方魚屋、八百屋物一円入り申さず候。自然入候とも当分買いに仕り候間、人を付け置き候儀無用に候と申し渡す。

三月二日 天気能く少し曇

一、下谷様今日より用伯の針御さし、此方御奥様御名おゆう様と御替りなされ候。

四日 朝中雨降る。其より天気能く夜中四ツ半地震。

一、公儀御内證御祝儀巻物、水野三郎兵衛方へ遣わす。

二月九日に完粟へ九鬼和泉守様より御使者白銀五枚持参、和意谷へ納め申すべきの由にて請け取り、使者は翌十日に帰る。

五日 雨降、昼地震

一、裏の御門へ御出夕御膳上がる。御ゆう様御宿より申しまいり、先日遣わし候御ゆう、手拭掛、かけばん、何れも巴の蒔絵これ有り候、昨日市正様へ窺い候へば、いただき候様に、と仰せ候由にて忝なき由申し参る

六日 天気能く

一、惣女中へ鯨鯨の汁振る舞う。

七日雨降る昼より上る

一、裏の御門へ御出、御ゆう様より大かかれい二ツ弥兵衛に下さる。裏の御門にて御料理仕し上る、女中へも、

八日曇、晩上り

雨降る

一、今朝迄一廻り、用伯針御指先、明日より御休なさるべき由。

一、三宅巡説来る。藤堂

和泉守様御意には先年も備後様より御借りなされ候御小刀、屏風御借なされその通りに仰せ付けなき由、伊予殿家来方迄申し遣わすべ

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします



神姫観光

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68  
(神姫バス山崎待合所内)

TEL (0790) 62-7588  
FAX (0790) 62-7589

き由御請申上る、則ち三郎兵衛へ申し遣わす。

一、水野三郎兵衛来る、

明後朝急御用の儀御座候て備前へ立帰りに罷りなり候、御内意窺いたき儀候はば澤権太夫（網政公家臣）方へ申し遣わすべき旨御意の由申し参る。

（注）澤権太夫ハ寛永十八年光政公へ御目見え仕り、承応元年正月十二日網政公へ御附なされ天和三年都合千石になされ、貞享元年十月五十二才にて病死（吉備温故）

九日 前夜より雨強く降る八ツ時分に上る

一、御上屋敷の御風呂たき下谷様入りなされ、御膳も表御座敷にて上る。

一、木やりの者四人、雨

中御徒然に付呼寄せ奥台所にて小唄共謡い申し候。

十日 天気好

一、昨日の便宜に林次太夫娘姫路中にかい町切付けや次郎右衛門女房に呼び申したき由書付一通次太夫指しのぼる。歩行の者以外は縁組仰せ付けなされざる筈に

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

本店  
山崎町さつき通り

TEL (0790) 62-0700  
FAX (0790) 62-2117

ブックランド店  
山崎町中井

TEL (0790) 64-2051  
FAX (0790) 64-2052

て候も横目中書付御内意を得て仰せ付なされる儀に候故其わけ書

付、澤権太夫方迄遣候えは権太夫返事に願いの通り申し候えと昨日申来りに付今朝松井七右衛門へ申渡す。

一、政元様古口完粟の者へ御ゆう様より遣わされ候、その御礼申参り則ちおつほね方へ遣わし申候。

一、水野三郎兵衛今朝立ち候由、就てその封文一通遣わし今日帰り申し候、完粟百姓共に山々にて松木最早伐らせ候てしかるべき由御意なされ候、藤堂和泉守殿小刀屏風御借りなされたき由申参り今日 唯悦迄為持遣候。今日下谷様のうのう七のゆたのゆに御灸、お通様ちりけすぢかいに御灸、それより表へ御出、御馬見所にて御前に上る。

十一日 天気好

一、裏御門へ御出夕膳上る、完粟へ町飛脚に状遣わす。松薪の儀申し遣わす。

一、昨日三郎兵衛より参る、文掛硯へ入、完粟より参る状共差上候へば御覧遣わされ、完粟へその返事仕る。

十二日 昼迄の内少雨降、其より天気吉

一、下谷様御つう殿御下屋敷へ御入、それよりやなか七面道灌山へ御入、御帰りに御風呂へ御入、夜に入り御帰り、三宅巡説より御小刀、屏風帰る。

（注釈）七面大明神社ハ同所は（道灌山）延命院と云える日蓮宗の寺に安置する。開山日長上人万治三年庚子正月十六日夢中に靈告を得て後勧請すと言えり（江戸名所図会）。七面ななおもて



は、元身延山にあり峰七ツの山なり、古之日蓮聖人此の身延山

にして法華経を誦授あり。その声礼亮にして谷峰に響き天女あ  
ま下り千窪刹女ようこうし給うらん、聞く人感涙を流しけり。

かかる所に一人の美女忽然として来り給い聖人にむかつてのた  
まわく、「我は此山の神なり、経王読じゆの声に引かれて住す、  
今より後守護神となりてこの法を守るべし。我が本躰を見給え  
とて大蛇の姿を現して、やがて御姿をかくし給う。聖人即ちこ  
れをあげめ、身延山の守護神とし給えり。爰に新堀村（日暮里

村）宝珠山延命院の住持日長上人万治三年庚子正月十六日うた  
た寝の夢に七旬にたけ給ひし老僧こうぞめの袈裟をかけ水清の  
数珠をつまぐり枕元に来り給いてかならず七面の明神を勧請せ  
よ、しからば大いに繁盛して宗流ますます広がるべしとお告げ  
をこうむりて夢はそのままさめたり。（中略）よって日長上人  
此の地にも七面明神妙見大菩薩をおまつりし、あがめ奉りたり  
（江戸名所記）。

十三日 天気吉  
巡説より帰り候小刀屏風善六方へ遣わす。御刀筒大小二ツ出来、  
善六へ渡す。

十四日 曇南風強く吹く  
一、春名円齋の娘、中の丸様奥方に奉公に出し置き候え共年明け  
罷帰り候て手前に置き申したき由鈴木閑齋を以って申し候。

十五日 昼前より天気吉  
一、下谷様おつう殿、裏御門へ御出、左京様入なされ候、何れも

御裏御門にて御食事上る。  
澤井六右衛門、御局へ申候は廿日前後の内石見様御下屋敷へ入  
りなされ候様にと又おつう様にも入らせられ候様にと申し参る。  
御返事自らは是れ成らざるべき由。今六日に酒井雅楽頭様、土屋  
但馬守殿（幕府執政）へ左京様御目見えの儀仰せなされ候、外  
の御老中へも追付け仰せらるべく候、左候はば近日御目見へ相  
済し申すべくと思召候由、六左衛門に仰せ遣わせ候。

十六日 天気吉 曇  
一、十八日の祭御門外にての見物男女共に無用と澤権太夫方より  
申し参る。是は只今の  
時節故、右の通りに候。  
少将様廿八日御  
着、廿七日戸塚御泊り、  
廿八日は川崎御昼休み。  
一、裏に番町本多八左衛  
門殿の長屋、中島彦左  
衛門見る。

十七日 昼より  
雨降る  
一、下谷様てんすう、お  
つう様しゆうもんでん  
すう御灸遊ばさる。

一、明日板倉左京様御目

きれいなカラープリントの店



Specialty Camera Shop  
**コーエーカメラ**

本店 宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089  
フリーダイヤル ☎0120-440-990  
FAX0790-62-7429  
咲ランド店 TEL0790-63-0533

見え遊ばさる由、申し来るに付き、下谷様御帰り、供、新兵衛源助、善六郎、彦七郎、又五郎、御歩行三人参る。

十八日、八ツ過より雨少づつ降る

一、左京様今朝御目見え遊ばされ候由にて、此方へ入なされ、おのし御吸物裏御門にて上る。観音祭礼これ有り、おつう様裏御門へ御出。

二十日 天気吉

一、板倉左京様より御目見え遊ばされ候、御祝儀に御上下三具箱、肴一種、弥兵衛に下さる。澤権太夫方より申し越し候は、唯今、大井新右衛門殿御出なされ候、御老中新右衛門殿、市正殿へ仰せ渡され候は、明廿一日四ツ時分に御用の儀候

間、信濃守(綱

政公弟政言)に御登城遊ばされ候様に申し参り候由。

一、多分御跡目の仰せ出されにてこれ有るべき哉と、完粟へ六日飛脚に右の次第申し遣わす

廿一日 天気吉

一、今朝信濃守様御登りに付、佐々宇右衛門御



供にて御城へ参る。

一、御跡目仰せ出なされ候 はば御家中さかやきすり、取次兩人上下を着居り申すべく候。御祝儀物参り候はば何方よりの納め、使者への口上伊予守に問い申すべく候。次郎丸(綱政の次男数馬)方へも申し遣わすべく候。弥兵衛、新兵衛、宇右衛門、上下着居り申し候。仰せ出しの御左右次第柵門を開き申すべく候。

一、上意の旨信濃守へ仰せ渡されの趣、池田豊前守筋目願仕これ有りもつとも思召し候。跡目の儀相違なく伊予守次男次郎丸に仰付けなされ候。御老中の御挨拶に豊前守歳若にて死去不敏に思召され候由也。信濃守様御城より御帰り、宇右衛門に右の通り仰せ聞かされ、石宇右衛門罷帰る。

一、予州様より御使者、澤権太夫来たる。右上意の旨を申、家中の者共さかやきをすり改め居り申す様にと御意候。おつう様にも御言伝御返事あり、即ち権太夫帰る。即刻弥兵衛、新兵衛御礼に参る。兩人御目見え左門(日置)取次諸式御礼申し上げる。完粟江戸の者共の惣名代として宮野頼母備前へ罷り越し、次郎様へ御目見え御刀銀馬代にて御礼申し上げ、武州様より参り候三原の御刀、少将様より参り候青江の御脇差指上候へと仰せ出られ次郎様と申すべき事。

一、御通様御泊りかけは御無用、日帰りには板倉石見様御下屋敷へ入りなされる様に。大井新右衛門殿、松平求馬殿、池田治左衛門殿御出。池田信濃守様御出、奥へ御通り御帰。松平土佐守様

よりおつう様へ御使者、弥兵衛方へも御口上。久世大和守様より御使者宮田宇左衛門参る、是は弥兵衛方迄の御使者、式台へ参り、即刻御礼に大和守様へ弥兵衛参り、帰りに完栗、大坂、京への状認、京都俊庵へ申し遣わすは、五両より七両迄の内にて金屏風一双調べふち黒ぬり、かな物しんちゆう、へり念入、外函棒共にかき合外函のかな物しんちゆう、板倉石見守様御意村田三郎右衛門方より御跡目の御祝儀申し来たる。市正様より宇野清左衛門。

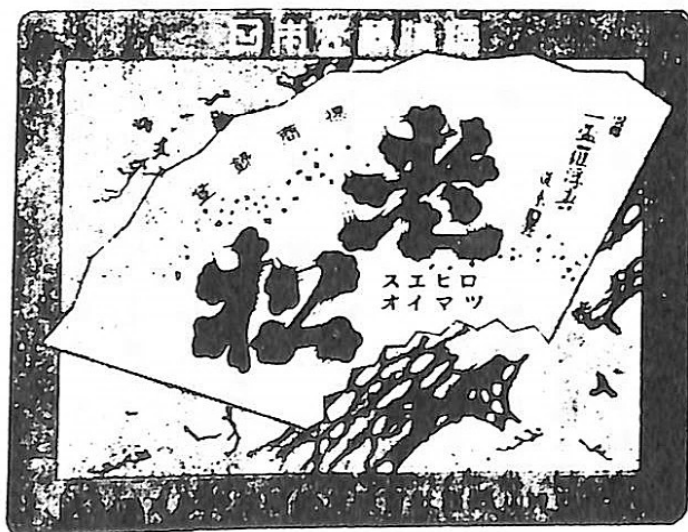
一、おつう様へ御祝儀に干鱈五枚弥兵衛上る。

廿二日 天氣吉

一、伊予守様両御前様へ箱肴、おゆう様へ鴨一羽、下谷様へ鴨一羽、弥兵衛上る。伊予様市正様へ干鱈五枚、おゆう様へ鮑五、両御前へ百疋づつ宇右衛門上る。今日伊予様御前様、雅楽頭様の家来関友之助、土佐様、市正様、新右衛門殿、信濃様両御前様、修理殿、左京様御奥様、治左衛門殿参られ候。

一、御通様より生鯛貳枚弥兵衛へくださる。

(以下六月八日頃迄ハ御遣イ物分ケニ関スル詳細ナル記録ニ終始シ、尚本日記ハ貞享三年六月ニ至ル迄ノモノ家ニ存スルモ是等ハソノ他ノ記録ト合セ追テ一冊ニ取マトメ「続完栗日記」トシテ発表ノ予定ナリ)



# 「山崎町歴史街道」(一)

会報部

— 山崎町の史跡めぐりをしませんか。 —

私達郷土研究会は郷土の誇りである史跡を大切にし、後世に伝えるため、今までにもたくさんの案内標柱(石柱)を建ててまいりました。そこでこれらの史跡を山崎城本丸を手始めに、これから本誌上へ順番に掲載していきますのでどうぞご利用下さい。

1、山崎城本丸「別名鹿沢(ししさわ)城」と城郭(石柱場所)  
山崎町歴史資料館前

山崎町役場の東の角に「大手前」の大きな標柱があります。その東側の道を少し南下し、図書館前を通り抜けると両側に白壁を巡らせた高麗式の透かし門(江戸時代建築資金寄贈者「紙屋」の名から通称「紙屋門」)があります。この門が本丸正面の玄関前の門であり、この中が本丸跡で現在本多公園になっていま



コーヒーハウス

## らふ

山崎文化会館西

☎ 62-8559

す。

元和元年(一六一五)松平石見守輝澄(本姓池田氏)が六粟郡三万八千石の領主として入封し、初めて築かれた平城です。この本丸は三方を薬研濠の内堀で囲み、南は自然の崖地を利用して川水を引き込んだ堀を巡らしていました。また二の丸は東側(現在山崎小学校地)と西側(現在文化会館地)に置き、そしてその外に中堀を経て三の丸を置き、上士の武家屋敷を配置し、その三の丸の回りに外堀を巡らせ、町屋と隔絶し諸門を設けて次第に城下町の陣容を整えていきました。その後、寛永八年には佐用郡を加封され六万三千石となり、町の周囲に弓鉄砲の足軽隊の組屋敷を配置し、町屋と北方の城山を取り囲む独特の城下町を形成しました。以来松平周防守康映五万石、松平備後守恒元三万石と転封交替を重ね、延宝七年本多忠英の内部により壱万石となり、かなりの城郭を備えながら陣屋と称する構えとなっていました。

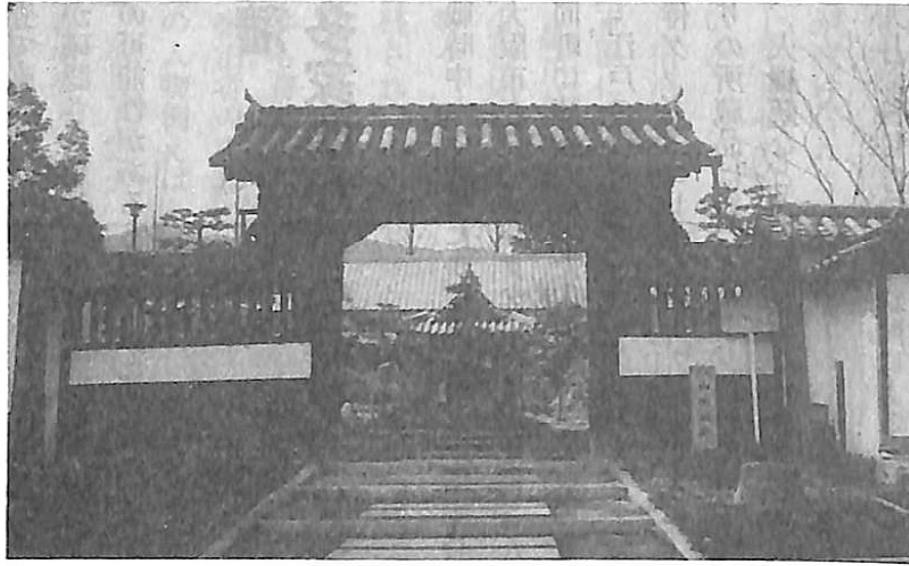
2、内堀の跡(石柱場所) 本多公園北側入口

山崎城の本丸は周囲より一段高く東・北・西の三方に、幅一間(約一八m)程の薬研濠の内堀を巡らしていました。そして内堀から分かれて中堀があり、そしてまた鹿沢の北側には長く伸びた外堀がありました。

3、中堀の跡(石柱場所) 山崎小学校グラウンド北西角

中堀は、二の丸(現在山崎小学校地)を囲む堀で、幅約一五mほどの薬研濠でした。中堀から分かれて出て、東へ約一七〇mほど伸びて中鹿沢と境し、更に南へ四〇mほど伸びて東鹿沢と境し

ていました。つまり一の丸を北と東でし字型に囲んでいました。



## 新宮宮内遺跡(国指定史跡)発掘調査概要

平成十年十二月から本年一月にかけて新宮駅北部の新宮宮内遺跡の発掘が行われた。

新宮宮内遺跡は、揖保川中流域の沖積平野に営まれた集落遺跡である。この遺跡はいまからおよそ二千年前の弥生時代中期の頃を中心としているが、既に三千年程前の縄文時代後期頃から古墳時代、飛鳥時代、奈良・平安時代までの人々の足跡をたどることができる。

遺跡範囲は、播磨新宮駅北側の揖保川旧流路右岸の三日月状の自然堤防上に立地している。出土した遺物は膨大な土器の他に、打製・磨製の石包丁、石斧、石鏃、石錐、砥石などの石器、さらに分銅型土製品、碧玉製管玉、土製紡錘車、鉄製の刀子などの貴重な遺物が発見されており、当遺跡が新宮町誕生の母胎となる遺跡であるだけでなく、弥生時代中期の播磨におきる集落のあり方を示す遺跡であり、遺存状況も良好で、あまり開発の影響も受けていないことから遺跡範囲の内約4haが国の史跡に指定されている。

新宮町ではこの貴重な新宮宮内遺跡を中心として歴史公園「おとりの郷」公園の設備を進めることにし、どのような遺構が残っているかを調べて、公園の基本構想を立てるため、昨年計画地内に地中レーダー探査を実施した。その結果、溝や住居址、円形周溝墓、大型柱穴群などが遺存していることが予想されたので、

昨年暮から今年にかけて、遺構の予測される地点にトレンチを設け、発掘によって補足調査を実施した。

今回の調査で直径一九mからなる（周溝の幅二・四メートル）円形周溝墓が確認された。弥生時代中期のものとしては全国的にも最大規模の可能性のあるものとして注目されている。

## 山崎藩

### 本多家ゆかりの侍グッズを紹介

山崎町に戦時中から戦後にかけての小、中学生時代に生活した経験を持つ大阪市在住のコレクター、井出正信さん（六四）が、江戸時代、同町に陣屋のあった山崎藩、本多家ゆかりの品々を紹介した新着「江戸の侍グッズ・コレクション」を発行した。

「江戸の侍グッズ・コレクション」は九十九ページ。このうち本多家ゆかりの所蔵品は約二十ページにわたって記載され、よい、陣羽織、火縄銃などが、きれいなカラー写真入りで収録されている。

平成十年九月六日付けの神戸新聞によると、井出さんは東京生まれ、少年時代に見た時代劇映画などを通じて侍の所持品に関心をもち、コレクションを始めた。少年時代、山崎町で疎開生活を過ごしたことがあり、こんど本多家所蔵品を新刊の著書で紹介することにしたという。井出さんは四年前、十手をテーマにした本

を出して以来、コレクションシリーズを出版しており、「江戸の侍グッズ」はシリーズ四冊目。

なお、本誌は安井書店でも入手できます。

### 草津宿本陣と近江商人の 発祥地五箇荘町を訪ねて

岸本正理

平成十年度秋の研修旅行は、滋賀県草津市の宿

本陣と近江商人の発祥地の一つ五箇荘町の近江商人屋敷を見学した。

会員六三名は二台のバスに分乗して快晴の高速道を東に向かってひた走り、草津市には九時三〇分頃に到着した。

はじめに草津宿本陣を訪ねた。ここは古来東海道と中仙道下りは分岐点であり、上りは合流点で

創業明治28年・さつき本舗

# 四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の  
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司  

本店・播州山崎町さつき通り 電話162-0170  
山田店・播州山崎町山田 電話162-0160

ある。

本陣とは、江戸時代諸街道の宿駅に設けられた武家用の泊りおよび休憩施設で、参勤交代の諸大名や京都の公家等身分の高い人々の利用する今日で云うなら高級ホテルの様なものである。大名の宿泊所には、それにふさわしい玄関、部屋、台所、湯殿、便所、庭などが設けられている。湯茶や食事をする器具、寝具が行列の荷物として運ばれ、なかには風呂桶、たらい、便器まで搬入する大名もいた。

本陣には、宿泊大名の官職を墨書した札（関札という）を持参した。玄関正面に残された関札が数枚陳列してある。「松平左近

将監宿」「細川越中守宿」「盛岡少将休」「二篠殿御休」等々。宿帳は百八十四冊残されている。それは、歴史の証である。災害や大事件も書留められている。宿泊者の中には、歴史上の人物例えば浅野内匠頭、吉良上野介、新選組の近藤勇等々。明治になって本陣が廃止される直前の宿泊者は皇女和宮であった。

## 呉服とジュエリー



本店 本町(さつき通り) 62-1680

咲ランド3F呉服のとくさや 63-0568  
" 2Fジュエリーとくさや 63-0557

「この見学を終えて次に近江八幡の食事処「あきのどの里」に向う。食事はすき焼きだった。

午後は近江商人発祥地の一つ五箇荘町を見学する。

近江商人は、日本の商業の創造者であり担い手である。その近江商人のふるさとの一つに五箇荘がある。堀割りに囲まれたまるで城下町そっくりの町並みで、それも大きな屋敷が並び、高い堀の内側にはすばらしい庭や建物が数多く保存されている。今も東京や京都や大阪で盛業中の近江商人の実家のある所で、かつては家族たちが住んでいたけれど、今では故郷ばなれしてしまっている。

一体どうしてこんな近江の国に数多くの商業家が生まれ育ったのか、その発生はいまだに謎である。近江の国にはさまざまな産物がゆたかにつくり出されている。それらの産物を持って他国に売りに行った。彼等を機敏な商業家に育てた一つの要素は、近江の国が東西交通、南北交流の要であった立地条件が挙げられる。最盛期は十八世紀で何百何千の行商人が、北は北海道から南は九州まで、天秤棒をかついで山を越え谷を渡って、日本六十余州を隈無く歩き回っていた。そして何百両という巨万の財をなした。

士農工商の中、商人は最下位に置かれている。その商人が武士や農民よりも立派な暮らしができたのは、農民のように年貢をとられることもなかったからである。だから、商人屋敷は、外観はさほどでなくても人目のつかない所で贅沢をした。その事が五箇荘町の近江商人屋敷を見学すれば実感できる。

五箇荘町を見終ったところで午後三時半を回っていた。時間の都合もあり皆も疲れていたので石馬寺の見学は無理だと思って割愛した。今回の旅行は、一人も体の不調を訴える人もなく、また、車は往復とも道路が順調でスイスイと走り山崎へ帰着したのは午後六時半頃であった。

## 「尼ヶ端」の石碑建立について

史跡部

山崎町最上山の展望台は、戦国時代の篠の丸城の砦のあったところ。

平成十年十月に山崎郷土研究会は、史跡部の事業として、この地に史跡碑を建立した。石碑の左側面から裏面にかけて次の文章を刻んでいる。

### 史跡 『尼ヶ端(鼻)』

天文の昔、出雲の尼子氏中国を征圧し、播州をも攻略す。因つて山前邑(山崎村)にも砦を築き、此の山端に物見櫓を設け、宇野勢の動きを監視す。

邑人此の山端を尼子が端と称したり。其後永禄四年安芸の毛利氏尼子の本城富田城を攻め滅ぼす。機を失せずして宇野氏も尼子の砦を急襲し、代官江津の四郎の首を取り鼻を削ぎ此の処に梟首せり。以後邑人此の山端を尼ヶ鼻と言えり。





平成11年・12年度

役職名	氏名	住所	電話
名譽会長	上木茂志		
顧問	小畑欽之助		
〃	庄和夫		
〃	壺阪寿		
〃	伊藤親保		
会長	福山清一		
副会長	堀口春夫		
副会長	久保寅夫		
副会長	志水美好		
総務部長	柳田弘		
会報部長	大谷司郎		
研修部長	垣口正信		
史跡部長	志水正信		
事務局長	岸本正理		

役員

役職名	氏名	住所	電話
山崎地区 西支部長	高野薫		
山崎地区 東支部長	仁尾永		
山崎地区 北支部長	横野一男		
城下地区 支部長	西村清		
戸原地区 支部長	志水正信		
河東地区 支部長	織金達雄		
神野地区 支部長	春名俊夫		
葛沢地区 支部長	久保寅夫		
菅野地区 支部長	河本雅視		
土万地区 支部長	高畑義一		
監事	河本雅視		
〃	三宅保雄		

